



日本植物分類学会 ニュースレター

No. 37

May 2010

目 次

諸報告

日本植物分類学会第9回大会報告.....	2
日本植物分類学会第9回大会に参加して.....	3
第9回大会エクスカージョン 感想.....	3
第5回大会発表賞受賞者の決定.....	5
発表賞受賞者 喜びの声.....	5
日本植物分類学会 2010年度第1回評議員会議事抄録.....	8
2010年度予算について.....	10
日本植物分類学会第9回大会総会議事抄録.....	11

お知らせ

第11回大会開催地の募集.....	12
国立科学博物館標本データベース公開のお知らせ.....	12
2010年度野外研修会のお知らせ.....	13
日・韓・中・植物分類学合同シンポジウム 「East Asian Plant Diversity and Conservation 2010」のお知らせ.....	14

寄稿

学名のラテン語 (5).....	14
------------------	----

研究での失敗談

生まれ変わったら改めます.....	16
-------------------	----

いきもの便り

ジンリョウユリ ～送粉者と花形質の適応～.....	18
---------------------------	----

会員消息.....	19
-----------	----

諸報告

日本植物分類学会第9回大会報告

大会準備委員会 渡邊 幹男

第9回大会を2010年3月26日より28日まで、愛知県刈谷市の愛知教育大学および名古屋市科学館（公開シンポジウム）で開催いたしました。会期中は全国各地から約200名の方々に集まっていただきました。まずまずの成功をおさめることができたものと考えます。予想以上の多数の方々に参加を賜り皆様にご深くお礼を申し上げる次第です。

大学入試（後期日程）を避け、また生態学会にも出席する方の便宜を考えて会期を設定したため、例年に比べてやや遅く年度末ぎりぎりの開催になってしまいました。会場は、当初名古屋市内での開催も検討したのですが、大会を運営するスタッフが少なく手が回りそうもありませんので、愛知教育大学（30年ほど前に分類学会を開催したのと同じ場所）で開催いたしました。国立大学の法人化後、大学施設の使用料は高騰の一途となっています。今回は大学との共催という形を取ったため本来より安価で大学施設を借りることができました。

公開シンポジウムは、2010年10月に名古屋で開催される生物多様性条約第10回締約国会議（COP10）に向けて、「生物多様性保全と自然史博物館の役割」というテーマで開催しました。さらに、エクスカージョン（瀬戸市海上地区のシデコブシ自生地）も企画しました。例年ならば、東海地方の代表的な固有種であるシデコブシがちょうど満開のはずでしたが、今年はやや遅れ気味でした。さらにバス会社の不手際で出発が遅れ、参加者の皆様には多大なるご迷惑をかけてしまいました。この場を借りて深くお詫び申し上げます。

26日から27日までは、口頭発表43題、ポスター発表55題の講演がありました。大会発表賞へのエントリーは、口頭発表22題、ポスター発表22題でした。例年通り大会発表賞にエントリーしている口頭発表を第1日目の初めに集めました。

2日目は午前中に一般の研究発表の続きが

あり、午後は総会、学会賞、奨励賞、論文賞、発表賞の各受賞者が発表され、賞状と記念品とが授与されました。引き続き、日本植物分類学会賞を受賞ならびに奨励賞を受賞された方々による受賞記念講演が行われました。その後、大学生協で懇親会を行いました。地元の名物と地酒（樽酒）を用意したところ、非常に大好評をいただきました。

3日目には、午前中にエクスカージョン、午後からは公開シンポジウム「生物多様性保全における拠点機関の役割—COP10に向けて」というテーマで、名古屋市と共催で講演と総合討論を行いました。COP10開催の年でもあり、アマチュアの研究者や一般市民の方々も興味深く聞いておられたように思います。

最後に、参加者の皆様に改めてお礼を申し上げますと共に、会長をはじめ大会運営にご協力下さりました学会事務局の皆様、座長を快くお引き受け下さった先生方、シンポジウムで講演を快くお引き受けて下さった先生方、さらには大会運営に直接関わっていただいた多くの関係者の皆様には心から感謝いたします。どうもありがとうございました。



懇親会の様子。手前にはきしめん、味噌カツ、手羽先。奥には樽酒が。（撮影：編集人）

日本植物分類学会第9回大会に参加して

梅田 育実 (愛知教育大学)

2010年3月26日から28日にかけて愛知教育大において日本植物分類学会第9回大会が開催されました。今回私は初めて学会に参加させていただきまし。また、在籍する愛知教育大学が開催地ということもあり、いろいろな裏方での準備なども経験させていただきました。

今まで、学会という言葉はしばしば耳にしてきましたが、学会とはどういうものなのかあまり想像もつかず、右も左もわからないまま1月中旬から研究室のメンバーで準備を進めてきました。一言で準備といってもそれらは多岐にわたり、研究発表の要旨集の作成、会場設置、その他名簿作成など、細かな作業も数多くがありました。また、当日は受付業務、タイムキーパーからお茶だしまで、多くの業務をこなしました。今回スタッフとして参加することで、このような運営側の細かな作業の積み重ねによって、学会が成り立っている

のだということを実感することができました。

また、私は当日タイムキーパーをつとめ、さまざまな参加者の発表を一番前で聞かせていただきました。どの参加者の方の発表もおもしろく興味深い発表ばかりで、とても有意義な時間が過ごせたと思います。時々、こうやって他の人が行っている研究を聞く機会を作り、勉強することも大切だと思いました。また、次の機会もぜひ参加したいです。

今回の初めての学会を通して、たくさんの刺激を受けました。私と同じタンポポの研究を行っている他大学の学生とも知り合い、情報交換をすることができました。また、懇親会では、さまざまな方と話をすることができ、楽しいひとときを過ごせました。学会は、自分の研究を見つめ直す良い機会になったと思います。いつか発表者のみなさんのように前にたって自分の研究の成果を発表できるよう、これから研究に邁進していきたいです。

第9回大会エクスカージョン 感想

山崎 真実 (北海道大学)

白い金平糖がてっぺんについているような草…小学生のとき、図鑑でシラタマホシクサを見た私の印象です。当時は植物名すら見ずにページを飛ばし、一面に白い点々が広がっている画像だけが私の脳裏に印象付けられました。再びそのイメージが記憶の底から立ちあがってきたのは、大学院生の時。ゼミで他の学生が「東海丘陵要素」の紹介をしたからです。そして、私の記憶の中の“白い金平糖”にシラタマホシクサという名前が与えられたのでした。と同時に、私は東海地方出身にも関わらず、近くにそんな植物があると知らなかった自分の不勉強を反省したのでした。愛知県は近くて遠い場所だったのです。

さて、今回エクスカージョンはシラタマホシクサではなく、シデコブシの観察が目的です。今や実際に遠い場所(北海道)に住んでい

る私は、東海地方の特色ある植物が見られる機会を逃すのはもったいないと思い参加しました。

当日朝、気合を入れすぎた(?)私は集合時刻30分前に到着したのですが、既に学会員らしき風貌の方々がチラホラと集まって立ち話をしています。タクシーの到着を待つうちに、おもむろにしゃがみ始める方ができました。決して疲れたわけではなく、採集の体勢です。周囲の視線が採集者の手元に集中し、額を突き合わせての談義が始まりました(北米原産キヌイトツメクサ)。とにかく、植物分類学会の皆さんはどんな場所で待たされても(植物があれば)待ちくたびれることはない、と感じました。

ウォーミングアップができた頃、タクシーが到着し、目的地であるシデコブシの生育地

まで一時間弱走りました。シデコブシ生育地までは、山間の住宅地の中を抜けて山へと続く小径を入っていきます。家庭菜園の脇に小さな案内看板も立っており、散策道として整備されているようです。まさに里山というか、裏山といった風情の場所です。参加された多くの方が自分の興味や研究に関係する植物に出会うと足が止まり気味となるため、時間制限がある中で、案内役の芹沢先生はハラハラされたかもしれません。そんな心配にお構いなく、ニオイタチツボスミレ、ショウジョウバカマ、カンアオイの一種、前葉体などを観察・解説・撮影し、各自で盛り上がっていました。

道沿いには小さな流れがあり、底には薄黄土色の細かな礫が見えていました。これが貧栄養な土壌や湧水の要因か？と眺めていました。よそ見をしていると、道は落ち葉が溜まったぬかるみや川を飛び越える場所もあり、日頃のフィールドワークが身のこなしに現れます。

歩くこと数十分でシデコブシ生育地に到着しました。付近は緩やかな斜面で、水の流れがほとんどない深くえぐれた幅の狭い流れがありました。その左右岸に3～4個体が花を咲かせていました。開花個体が少ないため、採集は中止と告げられました。花色は個体によって少しずつ違い、白っぽいものから濃桃色までバリエーションがありました。意外だったのが、シデコブシの樹形です。私はモクレンやキタコブシのように比較的真っ直ぐ垂直に伸びる樹形を勝手に想像していたの



ベスト・ポジションにあったシデコブシの花。(撮影：編集人)



1列に並んで湿地を観察。(撮影：編集人)

ですが、シデコブシは華奢で細い枝はしだれるかの様に曲がっています。その樹形のおかげで、手の届く位置に花が咲いていて、写真撮影には好都合でした。採集できないせいか、撮影に気合を入れる方も多く、ベスト・ポジションにある花には順番待ちができるほどでした。そんな私たちの様子を遠巻きにうかがっていた人々がいて、北海道の調査地で登山者から説教めいた質問をされたことのある私はちょっと心配してしまいました。が、私たちが去ると同時に彼らもカメラを取り出してシデコブシを撮影し始めました。地元でも知る人ぞ知る花なのですね。

帰りは小さな沼の周囲にミズゴケ類が生える湿地に立ち寄りました。枯れたヨシなどイネ科草本のリターに覆われて薄茶色一色でしたが、その上にハルリンドウの明るいブルーが点々と映えていました。モウセンゴケの一種も葉を見せていました。水草に興味のある私は水中を凝視してみました。木道からでは何も発見できませんでした。事実を語るのが科学ですが、実際に東海地方の丘陵地を歩いてみて「こういう場所にシラタマホシクサの“お花畑”が広がっているのだろう…」と一人で妄想していました。

百聞は一見に如かず。無知だった小学生が知を得るには、自分の目で見ることの積み重ねも大事だと改めて思いました。

エクスカージョンを企画して下さった大会実行委員会の皆様、ありがとうございました。

第5回大会発表賞受賞者の決定

大会発表賞選考委員会委員長 黒沢 高秀

日本植物分類学会第9回大会において優れた研究発表を行った若手研究者に授与する第5回大会発表賞は、以下の4名に決まりました（五十音順）。

口頭発表部門

岩崎 貴也（首都大・牧野標本館）「国境の長いトンネルを抜けると雪国ハプロタイプなのか？～三国峠におけるツリバナの種内遺伝構造について～」

三井 裕樹（京大・院・人間環境）「琉球列島における *Ainsliaea*（キク科モミジハグマ属）近縁種の系統進化」

ポスター発表部門

加藤 静（日本女子大・理）「一葉植物 *Monophyllaea glauca*（イワタバコ科）の斑入り形成機構の解明」

中路 真嘉（首都大・牧野標本館）「日本産スイカズラ属植物の花形態と訪花昆虫との関連性」

今回の大会発表賞も、パーマネント・ポストに就いていない若手研究者の学会員で、筆頭発表者かつ演者であり、申込時に大会発表賞へのエントリーを希望した人を対象にしています。エントリー数は口頭発表22題、ポスター発表22題で、口頭は最多、ポスターは例年並みでした。会長、評議員、前回受賞者からなる15名の選考委員が、対象となるすべての発表（利害関係のある発表を除く）を審査し、研究内容5点、発表のうまさ3点（ポスターの場合は視認性の良さやわかりやすさ）の合計8点満点で評点をつけ、評点の平均点をもとに委員の合議で受賞者を決定しました。4名のうち、岩崎さんは第2回のポスター発表部門に続いて2回目の受賞です。

2009年度の日本植物分類学会奨励賞も受賞者3名のうち2名は大会発表賞受賞経験者でした。今回の大会発表賞受賞者も、植物分類学の分野での今後の活躍に期待したいと思います。

大会初日の長時間にわたって多数の発表の審査に携わっていただいた委員の皆さん、選考に際して準備や集計などの作業を担って下さった学会幹事の坪田博美さんと東浩司さん、選考会場などにご協力頂いた大会準備委員会に感謝致します。

発表賞受賞者 喜びの声

編集人（以下、編）：こんにちは。先日の第9回大会では発表賞受賞おめでとうございます。まず、みなさん簡単に自己紹介をお願いします。

岩崎（以下、岩）：3月に首都大学東京の博士後期課程を卒業し、4月からは京都大学で研究を行っています岩崎です。氷期・間氷期が繰り返され訪れた第四紀中の日本列島における温帯林の分布変遷の歴史を明らかにすることを目的として研究を行っています。最近では日本海側と太平洋側の遺伝的分化や

日本海側要素の起源にも興味を持っています。

三井（以下、三）：京都大学人間・環境学研究所、博士課程の三井裕樹です。私は植物の多様な形態が、どのような進化的要因によって形成されるのか、ということに興味を持って研究しています。現在は、河川環境に高度に適応した溪流沿い植物を材料にして、その歴史的な進化のプロセス、近縁種との生態的な隔離、さらに適応的な細葉形態をもたらす遺伝子の解析を行っています。

加藤（以下、加）：日本女子大学理学部・物質生物科学科・今市研究室4年、加藤静です。現在は、同大学院博士課程前期（修士）に在籍しています。一葉植物の一種である *Monophyllaea glauca* の斑模様の形成過程について研究しています。何が原因で白く見えるのか、どのようにして長円状の斑模様が幾重にもかさなったかたちを示すようになるのか、といったことを調べています。

中路（以下、中）：首都大学東京牧野標本館でM1の中路真嘉です。私は野外に生育する被子植物の花の多様性にどんな意味合いがあるのか？ということに興味を持っています。花の多様性ですから、きっとポリネーター相と関係があるのではないかと考えています。そこで、私は属内に多様性に富んだ花をつける種が存在するスイカズラ属 (*Lonicera*: スイカズラ科) を用いて、花形質の進化と送粉昆虫の変化の関連性について研究をしております。

編：では早速、受賞が決まったときの率直な感想をお願いします。

岩：何かの冗談ですか？というのがその時の正直な感想でした。今回は賞を頂けるとは思っていなかったので非常に驚きました。が、受賞はとても嬉しかったです。

中：とても驚きました。大会中、ずっと実感がわきませんでした。大会が終わり、研究室に戻ったぐらいから、ようやく少し喜べるようになりました。

三：自分の研究を周りの方々に評価して頂いたことが、やはりとても嬉しかったです。

加：目が点になりました。「え？ほんとに？」と。そのあと、ジワジワと嬉しさがこみ上げてきて、先生をはじめとする研究室の方々に早く報告とお礼を言わなければと思いましたが、同時に、「より多くの方がポスターを見に来てくれるかな」という期待と、「受賞式、何かコメントを言うのだろうか」という戸惑いがありました。

編：あっ、それはありますね。私も大勢の前で不意にコメントを求められると、タジタ

ジになります（汗）。ではズバリ、受賞に際しての自信の程はどうでしたか？

加：あまりありませんでした。賞は考えておらず、「どうしたらよりわかりやすくなるか」ばかり考えていました。

中：大会賞に申し込んでおりましたが、私が選ばれるとは全く思っていませんでした。今回の発表は、途中段階の内容のため、具体性の乏しい内容でした。なので、全く発表賞をいただけるとはまったく思っておりませんでした。

三：自信はありませんでした。ただ、発表賞を取りたいという気持ちは持っていて、それを意識して準備をしてきました。

岩：結果が出たのが直前で、しかも話が複雑になってしまったこともあり、全くと言っていいほど自信はありませんでした。研究室の先生にも「今回、発表賞は諦めました」と事前に伝えていたぐらいでした（笑）

編：皆さん謙虚ですね。では発表に際して特に工夫した点を教えて下さい。

三：とにかく自分の研究の意義、おもしろさをシンプルに伝えることです。口頭発表は時間が12分と限られているので、自分としては話したいデータがたくさんある中で、必要なものを選び、明快な話の流れを作ることを心がけました。

岩：博士論文後に、その後の一つの発展型としてやってみた研究だったので、その研究に至るまでの流れをイントロできちんと説明するように気を付けました。タイトルから目的までだけで8枚と長めになってしまいましたが、これまでの研究過程をうまく説明できたのではないかと思います。また、今回は多くの方に興味を持っていただけのように、タイトルをインパクトのある変わったものにしてみました。発表前に「雪国ハプロタイプって何？」と多くの方がツッコミを入れてくださったので、作戦は成功だったと思います（笑）

編：なるほどですね。ではポスター発表についてはどうでしょう？

加：ポスターをパッと見たとき、足を止めて

説明を読みたくなるデザインになるよう気をつけました。文章は短く、図はデフォルメしてわかりやすくなるよう工夫しました。

中：とても恥ずかしいことですが、私自身が何か狙って工夫した部分はありません。ただ、黄色やオレンジといった色が個人的に好きなので、それが基調となっているポスターは少し目立ったかもしれません。

編：色も重要な要素ですね。では発表に際して大変だった部分がありますか？

中：まだ途中段階の結果だったので、系統関係のデータと訪花昆虫のデータがリンクできないので、そこをうまく紹介するのが難しかったです。

加：時間経過に伴う変化をポスターで表現するのが大変でした。図を試行錯誤して、結局名古屋入りする前日まで格闘していました。

岩：工夫した点と対応するのですが、イントロを長くしたことで時間がどうしても長くなってしまい、制限時間内にまとめるのが大変でした。発表本番も後半が少し早口になってしまったかなと反省しています。

三：指導教官の瀬戸口先生に、笑いをとるネタを一つ、スライドに必ず入れるように言われていたことです。全くウケなかったらどうしようと思っていたのですが、幸い会場はまずまずの反応でした（笑）

編：発表中に笑いをとるなんて、なかなかできるものではありません。もうベテランの域でしょうか？ 最後にこれからの夢について語って下さい。

岩：日本列島内はサンプリングで全都道府県に行ってしまったので、これからは朝鮮半島、中国、台湾の方まで調査に行きたいと思っています。東アジアのどこでも「その辺りに行ったことがある」と言えるようになればいいと思います。日本列島内にも行っていない場所がたくさんあるので、これからはあちこちに調査に行っているような植物を見たいです。

加：「おもしろい！」と言ってもらえることが

私の一番の幸せです。今回の受賞を励みに研究を続け、もっと「おもしろい」と思えることを見つけていきたいと考えています。また、自分だけでなく他の研究者が見つけた「おもしろさ」をも含めて、研究者ではない一般の人や中高生にわかりやすく伝えていける人になりたいと考えています。

三：植物は本当に見ていて飽きない、驚くべき“かたち”の多様性を持っています。このような植物の多様性形成のメカニズムについて、特に環境への適応・進化という視点から、遺伝子レベルの進化まで追求していきたいと考えています。

中：私は植物も昆虫も好きです。野外の自然そのものが好きです。出身が緑の多い地域だったからかもしれません。そんな私の地元でも昆虫層の減少や開発が少しずつ進んでおります。生物多様性が私たち人間の手で失われていっているのが残念に感じます。今年度はCOP10が名古屋で開催されます。世界的にも生物多様性が重要視されてきておりますが、まだまだ、浸透していったない現状もあります。植物と昆虫の多様性に興味を持っている人間の1人として、私は多くの人に生物の多様性の知識や尊さ、そして守っていく重要性などを発信していけるような人間の1人になりたいと思っております。

編：ありがとうございました。みなさんのそれぞれの夢に向かっての活躍を期待しています！



表彰後の嬉しそうな受賞者。左から三井さん、加藤さん、中路さん、岩崎さん。（撮影：編集人）

日本植物分類学会 2010 年度第 1 回評議員会議事抄録

庶務幹事 東 浩司

会場：愛知教育大学 自然科学棟 3F ゼミナール室

日時：2010 年 3 月 25 日 16:00～19:00

参加者

評議員：() 内は被委任者

出席 (10 名)：永益 英敏，黒沢 高秀，門田 裕一，角野 康郎，藤井 紀行，田村 実，五百川 裕，西田 治文，野崎 久義，邑田 仁

委任状出席 (3 名)：高橋 英樹 (議長)，瀬戸口 浩彰 (議長)，遊川 知久 (議長)

幹事会・委員会委員長：() 内は役職

出席 (13 名)：戸部 博 (会長)，東 浩司 (庶務)，堤 千絵 (会計)，秋山 弘之 (図書)，東 隆行 (ニュースレター)，永益 英敏 (編集委員長)，西田 佐知子 (和文誌編集)，坪田 博美 (ホームページ)，西田 治文 (自然史学会連合)，角野 康郎 (絶滅危惧植物・移入植物専門第一委員会委員長)，樋口 正信 (絶滅危惧植物・移入植物専門第二委員会委員長)，村上 哲明 (学会賞選考委員長)，伊藤 元己 (植物データベース専門委員会委員長)

欠席 (2 名)：梶田 忠 (植物分類学関連学会連絡会・日本分類学会連合)，篠原 渉 (講演会)

1. 評議員会開催にあたり，戸部会長から挨拶があった。
2. 東庶務幹事により，定足数が確認された。会長，評議員出席 10 名および委任状出席 3 名で，本評議員会は成立した。
3. 評議員会議長に門田裕一氏が選出された。議事録署名人として，角野康郎氏，田村実氏が選出された。
4. 報告事項
 - 4.1 自然史学会連合関連報告 2009 年度活動報告および 2010 年度計画。
 - 4.2 日本分類学会連合報告 2009 年度活動報告および 2010 年度計画。
 - 4.3 植物分類学関連学会連絡会報告 2009 年度活動報告および 2010 年度計画。
 - 4.4 各種委員会に関する報告
 - (1) 編集委員会 英文誌『APG』および和文誌『分類』の編集状況。ISI 登録未申請。CiNii での発行後即時公開について。
 - (2) 学会賞選考委員会 日本植物分類学会賞の選考経過と課題。
 - (3) 論文賞選考委員会 日本植物分類学会論文賞の選考経過と課題。
 - (4) 植物データベース専門委員会 現状説明と活動報告
 - (5) 絶滅危惧植物・移入植物専門第一委員会および第二専門委員会 現状説明と活動報告。レッドリストのカテゴリーの見直し。環境省第 3 次レッドリスト見直しの開始。
 - 4.5 図書関連報告 寄贈雑誌・交換状況の説明。
 - 4.6 日本植物分類学会講演会報告 2009 年度実施，2010 年度準備状況。
 - 4.7 ニュースレターに関する報告 2009 年度発行状況，2010 年度発行計画。
 - 4.8 ホームページ・メーリングリスト関連報告 学会公式 HP およびメーリングリストの運用状況。
 - 4.9 会務報告 2009 年度の事業報告。
 - 4.10 会計報告 会員状況，会費納入状況。

4.11 その他 2010 年度野外研修会について。日本・韓国・中国合同国際シンポジウムは韓国で実施予定（8月）。

5. 審議事項

5.1 2009 年度事業報告（案）について

東庶務幹事より、2009 年度事業報告（案）が提案され、質疑後、1 項目の修正が行われた後、承認された。

5.2 2009 年度決算報告（案）について

堤会計幹事より、2009 年度決算報告（案）が提案され、質疑後、3 項目の削除・修正が行われ、承認された。

5.3 2010 年度事業計画（案）について

東庶務幹事より、2010 年度事業計画（案）が提案され、質疑後、1 項目の削除・修正が行われ、承認された。

5.4 2010 年度予算（案）について

堤会計幹事より、2010 年度予算（案）が提案され、質疑後、5 項目の修正が行われ、承認された。

5.5 名誉会員の推薦について

戸部会長より、会則第 5 条に基づき会員 18 名を名誉会員候補として、総会に推薦することが承認された。

5.6 会長選挙について

戸部会長より、熊本大学の高宮氏が選挙管理委員長に指名され、承認された。

5.7 除名について

堤会計幹事より、4 年以上会費を滞納している 15 名の除名について提案があり、審議の結果、承認された。

5.8 繰越金および特別会計について

戸部会長より、現在 800 万円以上の繰越金が生じているおり、会務を円滑に進めるための経費に繰越金を使わせていただきたいとの説明があった。また、結果として赤字予算とすることが承認された。

5.9 レッドリスト見直し事業について

角野絶滅危惧植物・移入植物専門第一委員会委員長より、環境省レッドリスト第三次見直し作業について、環境省より学会が直接契約（受託）する方向で検討することが承認された。

5.10 その他

(1) 学会賞について

選考委員会の方で候補者の推薦や選考方法について議論していくこととなった。

(2) 第 10 回大会開催地について

戸部会長より説明があり、国立科学博物館筑波実験植物園の加藤雅啓氏のお世話でつくば市において開催ことが提案され、承認された。

(3) 日本植物分類学会創立 10 周年記念事業について

戸部会長より、2011 年度の日本・韓国・中国分類学合同シンポジウムは日本が担当するので、それを 3 月の学会大会に合わせて行いたい、との説明があった。また、記念出版物の出版も行いたいとの説明があった。

(4) 総会議事について

東庶務幹事より、2010年度総会議事次第(案)が説明され、承認された。

(5) 論文公開について

CiNiiでは発行後2年間閲覧制限を設けていたが、それを撤廃することが確認された。

2010年度予算について

庶務幹事 東 浩司

ニュースレター No.36 に掲載した2010年度予算(案)は、単年度収支のバランスをより明確に示し、また、より適正な会務執行のために、以下のような予算案に組み替え、評議員会および総会で承認されましたので、報告いたします。

収入の部	単価	数	2008年度予算	前年度予算との差異
会費				
一般会員	5000	815	4075000	0
学生会員	3000	80	240000	0
団体会員	8000	27	216000	16000
バックナンバー販売			100000	0
命名規約販売			30000	30000
利息			20	0
雑収入			50000	0
合計			4711020	46000
支出の部				
大会補助費			100000	0
講演会補助費			30000	0
出版物印刷費				
APG vol. 60(3), 61(1-3)	650000	4	2600000	500000 注1
分類 vol. 10(1-2)	500000	2	1000000	△ 100000
ニュースレター No. 36-39	55000	4	220000	△ 60000
英文校閲費			60000	△ 60000
出版物送料				
APG 送料	80	4400	352000	22000 注1, 2
和文誌送料	80	2000	160000	△ 130000 注2
NL 送料	60	4000	240000	20000 注2
会議費			30000	△ 100000
学会賞表彰経費			60000	△ 30000
自然史学会連合負担金			20000	0
分類学会連合負担金			10000	0
事務費				
消耗品費			50000	0
交通費			200000	200000 注3
アルバイト賃金 (発送代行料を含む)			370000	190000
封筒等印刷費			30000	△ 270000 注4
通信費 (小包手数料を含む)			70000	△ 130000
手数料・その他			25000	0
自動振替集金代行基本料			3150	0
自動振替口座確認手数料	190	126	23940	0
自動振替新規手数料	105	10	1050	0
レンタルサーバ使用料			15000	0
予備費			288880	88880 注5
合計			5959020	140880
単年度収支			△ 1248000	注6
前年から繰越金			9495929	
次年度への繰越			8247929	

注1: APG vol. 60 (No. 3) が未出版のため

注2: 発送費の見直しによる

注3: 会務執行のために計上

注4: 事務局移転がないため

注5: 役員選挙費、旧分類地理学会会計ノート電子化謝金含む

注6: APG vol. 60 (No. 3) の印刷代、送料 (本来は昨年度の経費)

日本植物分類学会第9回大会総会議事抄録

庶務幹事 東浩司

会場：愛知教育大 第一共通棟（301 教室）

日時：2010 年 3 月 27 日 14：45-15：45

1. 総会に先立ち戸部会長から挨拶があった。
2. 総会に先立ち芹沢大会準備委員会委員長から挨拶があった。
3. 東庶務幹事より総会出席者数が 95 名であることが報告された。
4. 門田裕一氏が議長に選出された。

5. 報告事項

5-1 会務報告

東庶務幹事より、報告内容は第一号議案と同じであるので議案審議の際に報告するとの説明があった。

堤会計幹事より会員数は増加傾向であることが説明された。

最近逝去された学会員に対して黙祷が行われた。

5-2 各委員会からの報告

・編集委員会

永益編集委員長より編集出版状況について報告があった。

・絶滅危惧植物・移入植物専門第一委員会

角野委員長からレッドリスト第3次見直し作業が開始される旨の説明があった。

・絶滅危惧植物・移入植物専門第二委員会

柏谷前委員長の辞任により、後任に樋口正信氏が指名された旨の説明があった。レッドリスト第3次見直し作業が開始される旨の説明があった。

・植物データベース専門委員会

伊藤委員長から現状説明があった。

・学会賞、論文賞および大会発表賞選考委員会

総会後の表彰式で審査結果の報告を行うことが説明された。

6. 審議事項

・第一号議案 2009 年度事業報告書並びに 2009 年度決算報告書承認の件

前年度の事業報告と決算報告が東庶務幹事と堤会計幹事よりそれぞれ行われた。綿野監事より、会務及び会計が適切に行われているとの監査報告があった。審議の結果、賛成 95 票、反対 0 票で、出席者全員（95 人）により承認された。

・第二号議案 2010 年度事業計画案並びに 2010 年度予算案承認の件

東庶務幹事と堤会計幹事より上記二件について説明があった。また、戸部会長より予算案について補足説明があった。審議の結果、賛成 91 票、反対 0 票で、出席者（95 人）の 3 分の 2 以上をもって承認された。

・第三号議案 名誉会員の推薦について

会長より、会則第 5 条に基づき、18 名の名誉会員の推薦が行われたが、会員からの指摘により本郷次雄氏が逝去されていることが明らかになったので、次の 17 名が名誉会員に推薦された。水島うらら、岩槻 邦男、北川 尚史、関 太郎、吉村 庸、水谷 正美、濱谷 稔夫、大村 敏朗、伊藤 武、佐々木 太一、渡辺 定元、大場 達之、多田 一郎、橋本 竹二郎、新田 あや、山本 明、

大橋 広好。

審議の結果、異議なく承認された。

7. その他

7-1 第10回大会開催地について

東庶務幹事より、次回大会を国立科学博物館筑波植物園の加藤雅啓氏にお世話いただき、2011年3月18日～20日(予定)に開催することが報告された。加藤氏より受け入れにあたっての挨拶があった。

7-2 日本植物分類学会創立10周年記念事業について

戸部会長より学会創立10周年(2011年)を迎えるにあたり、記念大会および記念出版物を計画している旨の説明があった。

7-3 野外研修会開催について

東庶務幹事より、熊本大学の藤井紀行氏のお世話により、阿蘇地方にて8月ごろに行われることが報告された。藤井氏より開催にあたり挨拶があった。

お知らせ

第11回大会開催地の募集

庶務幹事 東 浩司

日本植物分類学会第11回大会(2012年)の開催地を募集いたします。大会開催にあたっては、講演会場(約150名収容可能な広さ)、クローク、本部、休憩室、ポスター発表会場等のスペースが必要となります。また、大会中に評議員会等の会議室をお借りすることになります。大会前の準備としては、大会案内と大会申込書の作成、プログラム編成、要旨集の編集・発行、懇親会会場の選定などがあります(大会準備に関するマニュアルが代々の大会準備委員会により引き継がれています)。大会運営は学会からの補助金(10万円)と参加費で行っていただきます。大会開催をお引き受け下さる(あるいは場合によっては引き受けても良い)という会員の方がおられましたら、庶務幹事宛(下記)にご連絡をお願いいたします。ご参考までに、これまでの大会開催地(旧学会大会を含む)は学会ホームページ(<http://wwwsoc.nii.ac.jp/cgi-bin/jsps/wiki/wiki.cgi>)の「過去の大会プログラム」でご覧になることができます。

〒606-8502 京都市左京区北白川追分町

京都大学大学院理学研究科生物科学専攻 植物学系植物系統分類学学科内

日本植物分類学会事務局(庶務幹事 東 浩司)

TEL & FAX: 075-753-4125 e-mail: jimu@e-jsps.com

国立科学博物館 標本データベース公開のお知らせ

海老原 淳(国立科学博物館)

国立科学博物館ではこのたび、収蔵標本データベースの公開を開始しました。URLは下記の通りです。

<http://db.kahaku.go.jp/webmuseum/>

2010年5月現在、維管束植物標本約16万件の他、菌類標本約2.2万件、筑波実験植物園植栽植物の一部などの情報が検索・閲覧できます。データは随時追加予定です。

維管束植物標本は標本画像も順次公開しています(絶滅危惧種(都道府県レベル含む)についてはラベルの産地が判読可能であるため現時点では画像の公開を行っていません)。

2010 年度野外研修会のお知らせ

藤井 紀行 (熊本大学)

「阿蘇の草原植物と菊池溪谷の植物」

日程：2010年8月20(金)～22日(日)

第一日目(20日):13:00 JR 熊本駅集合。その後、熊本空港(14:00 頃)を經由して阿蘇方面へ。

飛行機をご利用の方は熊本空港(空港バスのりばの国際線ビル寄り)でお待ちください。南阿蘇ビジターセンターに立ち寄り、休暇村 南阿蘇に宿泊。根子岳の眺望よし。夕食・入浴後、スライド学習会の予定。

第二日目(21日):阿蘇花野協会所有のナショナル・トラスト地に移動し、ヤツシロソウやツクシトラノオなどの植物を観察する。その後、阿蘇市波野に移動し、道の駅「波野」で昼食後、阿蘇グリーンストック所有のトラスト地を訪問しヒゴタイなどを観察。宿泊は内牧温泉「角萬」の予定。阿蘇五岳の眺望よし。夜は夕食兼懇親会(阿蘇の郷土料理をお楽しみ頂けます)。

第三日目(22日):内牧温泉から菊池溪谷へ移動。菊池溪谷のトレッキングコースを歩きながら植物観察。天気が良ければ川沿いで昼食。帰路には道の駅「ほたるの里」で休憩し、熊本空港へは午後3時到着予定。最後、JR 熊本駅には午後4時に到着予定、解散。

今年度の野外研修会は、火の国、阿蘇で行います。時期は8月中旬、ヒゴタイやヤツシロソウなどの季節にあたります。今回は阿蘇東部に広がる原野で阿蘇特有の植物をメインに観察したいと思います。案内人として、阿蘇の草原で長年植物を観察してこられた瀬井純雄氏にお願いしてあります。現在、阿蘇の草原性の植物の多くが絶滅危惧植物に指定されています。これは阿蘇だけに限ったことではありませんが、人々の生活が大きく変わり、草原をあまり利用することがなくなってしまったことが原因です。これまで人と自然が関わり合って維持されてきた草原に多く見られた植物は今急速にその数を減少させています。そうした中、阿蘇では土地を買い取り、ボランティアの力を借りて昔ながらの草刈りや野焼きなどを行うナショナル・トラスト活動が進められています。今回二日目に訪れる場所はそのようなトラスト地です。ヤツシロソウやヒゴタイ、シオン、アソノコギリソウ、サイヨウシャジン、ワレモコウ、ノカラマツ、ユウスゲなどを観察することができます。

最終日の三日目は、阿蘇北部に位置する菊池溪谷で原生林の中を散策する予定です。菊池溪谷は、美しい溪谷と綺麗な水流によって、観光地としても有名な場所です。溪谷の周辺はモミヤツガなどの針葉樹、ブナやケヤキなどの広葉樹を中心とした原生林となっています。比較的多くのシダ植物が見られ、その際には高宮正之氏にご協力を得て観察会を進めたいと思います。

参加費用(JR 熊本駅到着から解散までの宿泊費用、朝夕の食事代、弁当代、懇親会費、集合から解散までのマイクロバス費など):一般 30,000 円程度(参加者の人数により多少増減する場合がありますのであらかじめご了承ください)

申込み:〒 860-8555 熊本市黒髪 2-39-1

熊本大学大学院自然科学研究科生命科学講座 藤井 紀行 宛

TEL&FAX: 096-342-3474 (直通) e-mail: nfujii@kumamoto-u.ac.jp

なるべくメールでお申し込み下さい。尚、郵便やファックスでも受け付けます。申込みの際には、氏名、連絡先住所、電話番号、メールアドレス、熊本までの交通手段(飛行機、電車、自家用車等)を明記していただき、7月20日までにお申し込みください。申込み順に20名で締め切らせて頂く予定です。

日・韓・中・植物分類学合同シンポジウム

「East Asian Plant Diversity and Conservation 2010」のお知らせ

日本植物学会選出組織委員 村上 哲明, 邑田 仁

日・韓・中 3 国持ち回りで毎年開催することになった植物分類学合同国際シンポジウムは、第 1 回を 2008 年に日本で担当し、第 2 回は昨年 10 月に中国（北京）で開催しました。参加された方は楽しくかつ有意義と感じられたようです。第 3 回は今年 8 月 20~21 日に韓国ソウル（ソウル大学）で開催されます。植物分類学会大会でもファーストサーキュラーが配布されましたが、分類学会ホームページにも掲載しています。できるだけ多く参加してシンポジウムを盛り上げるにより 3 国の協力関係を発展させていきたいと考えますので、積極的な参加をお願いします。サーキュラーについている Registration Form に記入してメール等で返送してください。特に口頭発表を希望される方は私たち組織委員にも至急ご連絡ください。なお、第 4 回は次回の植物分類学会大会に合わせ、2011 年 3 月に筑波で開催する予定です。

寄稿

学名のラテン語 (5)

永益 英敏 (京都大学)

学名に使える文字

学名はラテン語として扱われる（原則 V）ため使える文字はラテン文字であり、結論からいうと英語のアルファベットと同じ文字の 26 文字である（学名につけてある記号については次回に説明の予定）。

ラテン語は長い歴史を持つ言語であるから文字の種類と用いられ方は時代によって変化しており、命名規約中の表現はそれを反映したものとなっている。

第 60.4 条 古典ラテン語としては外来文字である w と y および古典ラテン語としては稀に用いられる k をラテン語の植物名の中で用いることは認められる。ラテン語の植物名に表れることがある、古典ラテン語にとって外来文字である他の文字及び合字、たとえばドイツ語の ß（二重の s）は書き換えられなければならない。

第 60.5 条 学名が文字 u と v または i と j が交換できる形、または、近代的な用法と相容れない別の用法によって著作の中で発表された時には、これらの文字は近代植物学の用法に合わせて書き換えられなければならない。

なんのこともだかわかりにくいですが、古典ラテン語とは紀元前 1 世紀（古典期）の模範的なラテン語のことである。単にラテン語といえはこの時代のものを指すのが普通。この時代より前にはラテン文字は 21 文字しかなかったが、ギリシア語由来の外来語を標記するため Y および Z の文字が導入され、古典期には 23 文字となった。Y、Z がラテン文字の最後に置かれているのはけして偶然ではない。Z も古典ラテン語としてはギリシア文字からの外来文字であるはずだが、規約には Z が言及されていない。Y には規約で明記しておくべき、おそらく I と関係する別の事情があるのだろう。

古典期になかった文字は J, U, W の 3 文字である。古典期には /k/ (// は音素を示す) の音を示す文字はラテン語では C が用いられ、K はほとんど使われなくなっていた。第 60.4 条でいう「古典ラテン語としては稀に用いられる k」である。

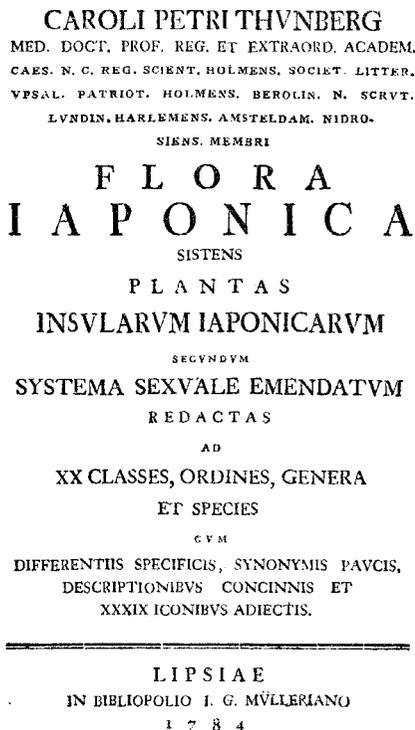
I は母音 /i/ と子音 /j/ の両方に使われていた（これが規約でいう「交換できる形」）が、15

世紀以降には母音 I と子音 J に使い分けが始まる。また、V と U は異としてどちらも母音 /u/ と子音 /w/ に対して交換できる形で用いられていたが、16 世紀以降、それぞれ子音と母音に対して使い分けられるようになった。一方、W の方は、ラテン語にはない古期英語の音（無声両唇軟口蓋摩擦音 /hw/）を表記するために uu と綴ったもの（二重の u）が起源で、その合字 w は 11 世紀頃つくられたらしい。英語では V は /v/ の発音に変化し、W が /w/ の音を示すようになったということである。

植物学ラテン語の著作では 18 世紀になっても I と J、U と V の使い方は現在とは異なっているものがある。図は Thunberg (1784) の『Flora Japonica』の例である。現在では U が用いられる場所に V が、J が用いられる場所に I が置かれているのがわかる。小文字では異なる使われ方をしていることにも注意してほしい。これらは規約にあるように「近代植物学の用法に合わせて」書き換えられなければならない。

古い著作中で注意しておきたいのは f（長い s）である。これは S の小文字の異体字で、語頭または語中では f、語末には普通の s と使い分けがされていることがある。

ラテン文字以外は使えないので、たとえば ø は oe に、ドイツ語の ß は ss に変更されなければならない。また、同時に発音することを示すための合字 æ, œ はそれぞれ ae, oe に置き換えなければならない（第 60.4 条、第 60.7 条）。



FLORVLA IAPONICA.

I. MONANDRIA.	Orchis fufannæ.
MONOGYNIA.	japonica.
Canna indica.	falcata.
Amomum mioga.	Ophrys nervosa.
DIGYNIA.	Serapias erecta.
Callitriche verna.	longifolia.
II. DIANDRIA.	falcata.
MONOGYNIA.	Limodorum striatum.
Nyctanthes sambac.	enfatum.
Ligustrum vulgare.	Cypripedium japonicum.
japonicum.	calceolus.
Olea fragrans.	Epidendrum monile.
Syringa fufpenfa.	tères.
Veronica virginica.	III. TRIANDRIA.
anagallis.	MONOGYNIA.
chamaedrys.	Olyris japonica.
arvensis.	Valeriana officinalis.
Iusticia japonica.	villosa.
Dianthera japonica.	Ficus carica.
Verbena officinalis.	pumila α. β.
Rosmarinus officinalis.	Iris squalens.
Salvia japonica.	fibrica.
Fraxinus excelsa.	verficolor.
Globba japonica.	graminea.
Lemna minor.	Moræa chinensis.
Salix japonica.	Commelina communis.
integra.	Kyllinga monocephala.
alba.	triceps.

*** 4

Cype.

図の説明

Thunberg (1784), 『Flora Japonica』の扉（左）と Florula Japonica の章の最初のページ（p. xxxix, 右）。I と J、U と V に注意。右では f（エフ）と紛らわしい「長い s」の立体 f と斜体 f が多く使われ、語末にのみ s が用いられている。

研究での失敗談

生まれ変わったら改めます

加藤 雅啓 (国立科学博物館)

まず、小さな経験を1つ。セラム島(インドネシア)のある山に登ろうとした折、霊山として崇める地元住民は強く反対したが、何とか了解してくれた。しかし、期せずして食糧調達のことによって問題が起り、その結果、調査を断念した。そればかりか、その村人連中の管理下に置かれながら3、4日の行程で海岸の村に戻らざるを得なくなり、最後は、山中に放置されたにも等しい憂き目にあった。ちょっとした料金交渉の対立も原因の1つとなったかもしれない。村人に協力してもらわないと調査は何もできないが、ポーター料は不当に高くできなかった。村人にとってわれわれは常によそ者であり、こちらが気づかないでも行動はちゃんと監視されている。どうすべきかわかっていたつもりだったが、このときばかりはうまくいかなかった。大きな問題にならなかったのは、幸いだった。

友人曰く、私は「自己管理能力のない」人間である。彼とは以前よく海外調査に出かけたが、その都度そのように指摘されたものだ。自分の持ち物はすぐになくし彼のものを取り上げたりなどしたからだ。調査ではあらかじめ計画をしっかりと立てることが肝要だが、その大筋を一旦決めると、後の詳細は誰かに丸投げしたものだ。詳細の決定こそ計画遂行上大切なのだが、このような癖は今も変わらず、そのため身近な人が尻拭いする。科博の研究プロジェクトを立案実行する場合も、アドバルーンをあげた後は若い人に任せてしまうという調子である。緻密さに欠ける私は、下記のように、よく言えば「行動しながら考える」と公言してはばからない。少しニュアンスは違うが、「自己管理能力がない」と合意通じるものがあるようだ。

私がカワゴケソウ科の研究を始めたのは、

スリランカなどで調査した1989年である。ある程度準備したつもりだったが、今考えるとお粗末な限りで、カワゴケソウ科の何たるかも十分知らず、生半可な知識を携えて調査を始めた。その上、帰路にタイに立ち寄って気軽に調査した際、タイの友人から「タイ国植物誌」のカワゴケソウ科を担当してくれと頼まれ、止せばよいのに安請合いしてしまった。10年経った今もその調査と研究に苦闘中である。最近、隣国ラオスに調査を広げている。これも軽い気持ちではじめたが、タイでは見たこともないような変わった種類で出くわした。タイの種類は微小なものばかりだが、ラオスではヒジキにそっくりな大型の種類もあった。これが形態上も進化上も問題の植物で、望外の面白い研究につながった。また調査中、ゼンマイ類にも出くわした。ラオスにあるわけがないと思っていたので、それを見たときはびっくりした(しかし後で、既に日本人によって採集されていたことがわかった)。何を血迷ったか、採集している最中に、ゼンマイ類を研究するぞと決めてしまい、傍らにいた仲間に宣言したのである。客観的に見ると軽率のそりはまぬかれない。科研費ももらい、学会で発表しているのはその流れであるが、共同研究者は重荷に喘いでいるようだ。読者の皆さん、これだけはいえる。調査や研究の成功の可否は周到な準備をするかどうかで決まるということ。しかし相反するようだが、向こう見ずな冒険も時には必要かもしれない。

人生の進路決定にも私の性癖は大きな足かせとなった。大学在学中に理学部へ転学部したとき、工学部志望がいい加減だったのが遠因だ。大学院進路を決めるときも、発生遺伝学から分類学へ変えた。志望変更について、

仲の良かった先輩学生から強く反対され慰留されたけれども、「分類学は遅れた分野だから、俺がやって立て直す」と言ってしまったのだ。なんという思い上がりだったか。ずっと後になった数年前、大学から科博に転職した。「科博を日本の一大研究拠点にして、分類学を立て直す」と思い込んだ。この時の判断もうぬぼれにもほどがあるとも思うが、瞬間的な激情でもなく、今だに職場でそんなことをまじめに言っているのだから、救いがたいかもしれない。

私は、粗雑さの一方で、常識にとらわれすぎていくつづくと思うことがある。カワゴケソウ科の形態を研究している途中、植物にあるべき茎頂分裂組織がないことがあるとはついぞ思いも及ばず、そのような指摘を無視

したことがあった。分裂組織があると論文に書いてしまった後だったので、後の論文で内容を訂正する羽目になった。海外の研究者がカワゴケソウ科には茎頂分裂組織があると解釈しているのに接するにつけ、私よりも常識が染み付いているのかもしれないと憐れんでしまう。だが、人ごとではない。最近でも、若い仲間が「葉」と「茎」は相同だと真剣に唱えたのに最初は信用せず眉唾物と思ったが、結局はそれが正しそうである。遺伝子発現のデータからも支持されて、今では魅力的な解釈に見える。「優れた科学者は常識を打ち破る」とはよく言われることで、私も一度ならず口にしたことがある。しかし、現実の私は常識の呪縛から解き放たれていないと反省しきりである。

編集後のひとこと

皆さんゴールデンウィークはどのように過ごされましたか？ 確か3年前のこの欄も同じ書き出しでしたが、今回は少し違います。

今、子供たちの間では「ベイブレード」が大流行。昔のベイゴマのグレードアップ版のようなものですが、子供たちに誘われてやってみると、これが奥が深い。いろいろなパーツを組み合わせて、攻撃型や持久型など自分に合った最強のベイを組み立てて闘うのです。

そして休日になるとスーパーや遊園地で開催される「ベイブレード大会」。もちろんゴールデンウィークは毎日どこかで大会が行われています。大会のついでに買い物、大会のついでにジェットコースター、大会のついでに植物園…本末転倒のようですが仕方ありません。どの会場でも受付の始まるずっと前から親子連れの長い行列ができています。出場できるのは小学生以下の子供だけですが、あまりに多くの人が並ぶので毎回抽選です。運よくわが子が抽選に当たっても、なかなかこれが勝てません。朝早く起きて、車で遠くまで来て、長い行列に並んで、1回戦敗退では本当にガッカリです。

しかしある日、奇跡的にわが子が2人とも1回戦目を勝ち抜きました。そのときは「やった！」と喜んだのですが、なにしろ参加者が多いので、次の2回戦目がいつ始まるのかわかりません。呼ばれたときにその場にはないと不戦敗になるので、長い間その場を離れるわけにもいきません。散々待たされた揚げ句、結局3回戦で2人とも敗れてしまい、参加賞しかもらえませんでした。子供たちはそれでも満足した様子でしたが、大人はその後用事を済ませて車を運転して帰らなければなりません。いやはや、疲れ果てたゴールデンウィークでした。

By 編集人

いきもの便り

ジンリョウユリ ～送粉者と花形質の適応～

横田 静香 (九州大学)

皆様、ジンリョウユリという植物をご存知でしょうか。これは鮮やかな色彩の清楚な百合です。ジンリョウユリ *Lilium japonicum* var. *abeanum* は西日本に広く分布するササユリの変種で、徳島県の蛇紋岩地帯だけに分布しています。5月下旬に開花し、花冠は6 cmほどの短筒型です。花被はササユリのように桃色ですが、基部はさらに濃い紅色になっています。しかし現在は個体数が減少し、絶滅危惧植物IBに指定されています。

私は3人の先生のご指導によりジンリョウユリの送粉生態に関する研究を進めることができました。まず、ユリ属の生態学的研究の面白さを大阪学院大の林一彦先生に教わり、それから九州大の矢原徹一先生の元でジンリョウユリの研究を始めました。

研究テーマを決めるため、矢原先生とジンリョウユリの自生地を訪れた日、小雨の石崖の上でジンリョウユリにトラマルハナバチが訪花する姿を見ることができました。それまではユリ属の主な送粉者はチョウとガで、ササユリはスズメガだけであると報告されており、ジンリョウユリの送粉昆虫はまだ分かっていませんでした。調査を進めると、ジンリョウユリの効果的な送粉者はあの雨の中で見た

ようにマルハナバチでした。しかし、わずかに夜行性のガも訪花していました。植生が貧弱な蛇紋岩地ですが、マルハナバチが訪花するツクバネウツギが群生していました。そしてそれが咲き終わる頃、ジンリョウユリが咲き始めるのです。

そしてある学会で、それまで見逃していた重要な形質に関する助言を人間環境大の藤井伸二先生からいただきました。それはササユリとジンリョウユリでは葯の付き方が異なり、送粉者の違いが関係しているかもしれないということでした。

詳しく調べてみると、ササユリでは葯が花糸にT字型に付き、ジンリョウユリではI字型に付くという違いがあることが分かりました。またササユリの開花時間は夜間であると報告されていましたが、ジンリョウユリでは7割の個体が夜間で、3割は昼間であることが分かりました。開花時間が多型的なのは、訪花数は多いが花粉を食害するため送粉効率が低いハチと、訪花数は少ないが送粉効率は高い夜行性のガの間で、最も全体の送粉効果



図1. ジンリョウユリ *Lilium japonicum* var. *abeanum* (撮影: 遠藤 博敏)



図2. 訪花するトラマルハナバチ (撮影: 菅原 歩)

が高くなる割合に落ち着いたものと考えられます。草地のササユリが、植生と送粉者相が異なる蛇紋岩地帯へ移ったことにより、スズメガからマルハナバチに適した花形質が進化したと考えられます。

5月下旬に徳島県を訪れる機会があれば、可憐ながらも逞しく花形質を進化させたジンリョウユリを見にぜひ足を運んでみて下さい。